

方法

実験参加者

若年成人群-32名(平均年齢 21.5 歳 SD=4.9 平均教育年齢=14.8 SD=1.4)

老年成人群-30名 (平均年齢 69.7 歳 SD =7.9 平均教育年齢=16.1 SD=3.8)

手続き

参加者はある特定の出来事からの自伝的記憶をさまざまな姿勢で思い出した。

練習課題—最も早期の子供の時の記憶を机に座りながら話す

このあと参加者は合計 8 個の記憶を思い出した。その記憶はそれぞれ異なった姿勢を伴いかつ参加者全員が経験しているようなものが選ばれた。

8つの記憶 (フィラー課題含む)

- 歯医者に行った記憶
- スポーツをした記憶
- 訪問者に対してドアを開けた記憶
- コンサートで拍手をした記憶
- 誰かに手を振った記憶
- 心臓に手をあてた記憶
- 昨日起こった出来事の記憶 (フィラー課題)
- 空想の出来事 (フィラー課題)

フィラー課題での姿勢

昨日の出来事について — 直立して椅子の背に両手を載せた状態

空想の出来事について — 直立してテーブルの上に両手を載せた状態

すべての参加者は同じ刺激を与えられた。しかし、参加者間で姿勢が変えられた。

フィラー課題は同じ姿勢で行われた。

どの参加者に関しても質問の半数は姿勢一致の状態で訊き、残りは姿勢不一致の状態
で訊いた。実験者は参加者が支持した姿勢をとるまでは記憶についての刺激を伝えな
かった。刺激に動きが含まれた場合はその動きを参加者がした後に教示を出した。記
憶の記述は少なくとも一文程度であった。

参加者は指示された姿勢をとりながら出来事に関する記憶を思い出し、さらにそのま
まの姿勢で記憶にある出来事を体験した時の年齢やそのことを追体験しているかどう
かを質問された。

出来事を体験した時の年齢はその記憶が現在からどれだけ離れているかを示し、一方

でその時の感情や想像しやすさはその体験へのアクセスしやすさを示す。

スコア

イメージ、追体験なし⇒0

イメージ、追体験どちらかあり⇒1

イメージ、追体験どちらもあり⇒2

これらの質問は参加者に対して元の出来事を再び思い出し、その出来事を思い出したことが記憶の検索に影響したかどうかを知るためのものであった。

思い出させようとする記憶の順番とフィラー課題の順番、姿勢の一致不一致の組み合わせはランダム化された。実験はコピーや反応時間の検証のために録音・録画された。反応時間は1ミリ秒単位で計測され、実験者が刺激を出してから参加者が記憶を検索し始めるまでを計測した。装置の不備で老年群1人と若年群2人の計3人のデータが使用できなかった。

8つの記憶全部の課題が終わると実験者はディブリーフィングシートを読み2週間後に筆者に電話するよう指示された。→不意の遅延再生課題

まず2週間前に話した記憶に関して自由再生の後に、実験者が残りの項目のヒントを出しすべての項目が再生されたかこれ以上再生できない状態になると課題は終了した。参加者は全員決められた日時に連絡してきた。

結果

表 1

記憶検索の反応時間の違いをみるために結果を分散分析にかけた。{被験者内要因（姿勢の一致、不一致）×被験者間要因（若年群、老年群）}

姿勢の一致不一致については主効果が認められた。 { $F(1,57)=7.84, MSe=11.98, p<.01$ }

年齢層については主効果がなかった。 ($p=.538$)

姿勢と年齢層の相互作用は見いだされなかった。 ($p=.081$)

表 1 反応時間の平均値と標準偏差

| | 若年齢群(<i>SD</i>) | 高年齢群(<i>SD</i>) |
|-------------|-------------------|-------------------|
| Congruent | 5.26(2.49) | 7.38(3.87) |
| Incongruent | 7.44(5.64) | 8.77(5.15) |

表 2

再生課題で思い出された項目数の割合を算出した。
 割合は年齢層（若年齢・高年齢）ごとに再生方法（自由再生・刺激後再生）×姿勢（congruent・incongruent）の6通りずつ算出。（フィラー課題含まず）
 自由再生の項目と刺激を与えられての再生の項目は相反条件。

自由再生による項目数の分散分析

{被験者内要因（姿勢の一致、不一致）×被験者間要因（若年群、老年群）}

姿勢については主効果が認められた。 { $F(1,60)=17.14, MSe=.037, p<..001$ }

年齢層による違いは見られなかった ($p=.167$)

姿勢と年齢による相互作用が認められた。 { $F(1,60)=17.14, MSe=.037, p<..05$ }

T 検定

自由再生では不一致群よりも一致群のほうが項目再生の割合が高く
 { $t(61)=4.05, p<.001$ }

一致群の中では若年齢群のほうが高年齢群よりも高い割合を示した。
 { $t(60)=2.49, p<.05$ }

再生された全体の項目数に関する分散分析

姿勢に関しては主効果が認められた。 { $F(1,60)=7.00, MSe=.058, p=.010$ }

年齢層間の有意差は認められず。 ($p=.276$)

姿勢と年齢層の交互作用も認められなかった。 ($p=.400$)

姿勢の一致により記憶の再生の割合が高くなった

→若年齢群が高年齢群に比べて追体験をより高い程度していたため。

追体験スコア { $t(60)=2.03, p<.05$ }

→若年齢群に比べて高年齢群がその出来事が起こってから今回思い出すまでの期間は若年齢群に比べて長いため。平均 remoteness (若年齢群=4.70年, SD=4.6 vs 高年齢群=25.48年, SD=15.01)

表 2 再生された項目数の割合と標準偏差

| | 若年齢群(SD) | 高年齢群(SD) |
|-----------------------------|----------|----------|
| Free recall congruent | .37(.23) | .21(.27) |
| Free recall incongruent | .14(.23) | .16(.24) |
| Prompted recall congruent | .46(.25) | .51(.26) |
| Prompted recall incongruent | .54(.31) | .49(.35) |
| Total recall congruent | .83(.19) | .72(.35) |
| Total recall incongruent | .68(.25) | .64(.43) |

付録 A ある実験参加者に対する課題の教示のしかた

記憶 1：姿勢不一致—ドアを開ける

立ちあがって、本棚のところへ行き両手を横板の上においでください。（実験参加者がその姿勢をとった後に）それでは私にあなたが訪問してきた方に対してドアを開けた時の記憶を教えてください。

—その時あなたはいくつでしたか？

—そのような出来事を再び経験しましたか？

もしそうならどのように再体験しましたか？ ()